




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 <b>2797</b> 号	氏名	進 武 一 郎
審査担当者	主 査	清川 兼輔	
	副主査	宇 路 等 思	
	副主査	鹿 毛 政 義	
主論文題目： 下咽頭癌リンパ節転移に対する術前化学療法の奏効度と病理組織学的評価			

### 審査結果の要旨 (意見)

予後不良であり、下咽頭癌の生存率を大幅に向上させたこと、組織学的に検証した  
 力強い論文である。特にリンパ節に対する組織学的知見が予後因子に最も因子に  
 なる点も非常に興味深い。今後更なる研究を進め、下咽頭癌の生存率を  
 今以上に伸ばすことが期待される。

### 論文要旨

本研究の目的は、下咽頭局所進行癌頸部リンパ節転移に対する neoadjuvant chemotherapy(以下 NAC)の効果を臨床病理組織学的に評価することである。方法：①NAC 群と非 NAC 群の臨床的奏効度の比較、②臨床的奏効度と組織学的効果を比較③実際に効果があったと考えられる摘出標本内の病理組織線維を数値化し、予後との関連を検討④9 例については大切片連続段階標本を作製し、リンパ節転移の詳細な所見を検討した。結果：①NAC 群は、生存率、遠隔転移制御率ともに良好な傾向を示した。②臨床的、組織学的効果は概ね一致していた。③線維化の部分が 50%以上の 5 年生存率は 100%、50%未満の生存率は 43% であり、NAC の効果があった症例は予後が良好であった。④脂肪織内浸潤や転移リンパ節とは離れた脈管内に癌浸潤を観察することができた。本検討の結果、臨床的、病理組織学的にも NAC 奏効例での予後は良好であり、大切片連続段階標本の作製による病理学的解析および組織内線維化の割合を数値化することは予後に影響を与える病理組織学的効果判定因子の一つになる可能性が示唆された。